平成 21 年、ユネスコ無形文化遺産代表リストに登録された越後上布が、
国の重要無形文化財第一号の指定産地として認定されたのは昭和 30 年。
しかし、認定を受けるには 5 つの条件を満たさなければならない。
その条件とは・・。

1. すべて苧麻を手うみした糸を使うこと。
2. 絣模様をつける場合は手くびりによること。
3. いざり機で織ること。
4. しぼとりをする場合は湯もみ、足踏みによること。
5. 雪さらしをすること。

コレ。
書くのは簡単だけれど、これらの一連の作業は大変な手間と日数を要し、
体力・気力・根気なくしては、とても全ての条件を満たすことはできない。

その中でも、5 番目の雪ざらし。
今では、越後の春の訪れを告げる風物詩となっている。

2 月から 3 月、晴れわたった青空、雪の巻機山をバックに
雪原一面に並べられた越後上布のカラフルな縞模様の情景はまさに壮観だ。
ステキ…。

だけど、何のために雪ざらしをするのかわからなかった。

なんと「漂白」を目的とするものだそうだ。
干してるんでもなく、こすって洗ってるんでもなく、漂白しているんだ。
漂白剤も何も使わず、汚れなんか本当に落ちるのだろうか？
いったいその秘密は・・・？

「オゾン」です。
雪から蒸発した水分に、強い紫外線が当たることでオゾンが発生し
オゾンの酸化作用で晒した布は漂白され、染料の色は鮮やかになり
黄ばみやシミが落ちるのだそうです。
ホントなのかなぁ・・・？

確かめるためにも私たち女子プロメンバーは、
雪ざらしの研修会に参加させていただき、貴重な体験をしてきた。

二人が端と端にわかれ、上布を持って真っすぐに並べる。
12 メートルの布は雪で湿り、思いのほか重くて扱いにくい。
前につんのめりそうになる。
なかなかピンッときれいに並ばない。
きちんと一定の間隔で並んでいるので、
自分が持った上布が真ん中でよじれても直しに行けない。
でも、専門のベテラン職人さんの息の合ったタイミングで「ふわっ」と
端と端を持ち上げ雪に晒すと、よじれることなくきれいな縞模様ができた。
晒す期間は一週間から二週間。
なんという手間なんでしょう。

これは科学の力がまだ解明される前からずーーーっと行われていた作業。
昔の人の知恵は本当にスゴイと思う。
オゾンがよく解らなかった私は、薬品を使えばいいのに…とすぐ思ってしまうが、
雪さらしの工程が重要無形文化財認定の条件の一つに入っているからには
この伝統は守らなければならないのです。

雪から生まれた越後上布。
雪に里帰り。
機織りの神様（巻機山）に見守られながら
綺麗になって誰の元へ帰っていくのでしょう。

近い将来この越後上布が幻の布にならないように…
早春の風物詩が幻にならないように、
越後上布に関心をもってくれる人が、もっともっと増えますように…